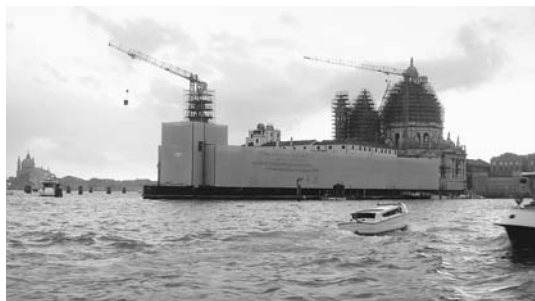


9

月5日から14日まで、ヴェネチアに滞在した。この街を訪れたのが何度目なのか、正確にわからなくなっているが、危うくサンマルコ広場に一度も立ち寄りなくなるところだったのは初めてである。今回はヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2008の日本館コミッショナーを担当し、アルセナールの近くのアパートと、メイソンの会場のジャルディーニを往復する毎日だったからだ。

美術展と建築展を通じて、いづれもヴェネチア側が場所を提供し、毎年各国が自前の資金を用意して、パヴィリオンに作品を設置する。しかも会場に入りきれない国は、街のあちこちに場所を借りて、同時期に展示を行なう。つまり、海外からは持ちだしても参加したいという状況がある。

もちろん、観光収入の方が圧倒的に多いだろうが、文化的な聖地としての価値を持つこと



ヴェネチアのプンタ・デラ・ドガーナ。内部を美術館に改造するための工事が進行中
写真提供：筆者

の訪問者にとっては、テーマパークのような非日常的な空間を感じてしまう。

滞在中、プンタ・デラ・ドガーナの現場を見学した。15世紀にさかのぼる古い税関を美術館に改造するプロジェクトである。これは海を挟んでサンマルコ広場のはず向かい、またはサンタ・マリア・デッラ・サルテーテ教会の隣にあつて、設計者の安藤忠雄の名前が仮囲いの上に掲げられていた。内部には安藤スタイルのコンクリートの壁が挿入され、アートスペースがつくられる。

興味深いのは、ヴェネチアがフランスの実業家フランソワ・

ピノのコレクションのための美術館の建設を許可する代わりに、税関の修復工事などの資金を出させていること。一応、40年の期間限定だが、更新される可能性も高いだろう。つまり、

一等地を提供する代わりに、市がお金をかけずに建物の保存工事が行なわれる。先だって、パラッツォ・グラッシも、外観はほとんど変わることなく、安藤のデザインにより、内部がピノの美術館に改造されていた。

来年のビエンナーレ国際美術展が始まる2009年の6月にあわせて、オープンするという。☺

祝祭都市ヴェネチアの 生きている道

@Venezia

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう
建築史家
東北大学准教授